

傷寒論は中国・後漢で3世紀初めに張仲景によって記された医術の書です。傷寒とは「寒に触れて冒されるもの」を言い、主に高熱を伴う病のことで、疫病もこれに当てはまります。

張仲景は、傷寒により多くの親戚縁者を亡くし、これを大変いたましく思いました。病気の原因や診察についてなど、過去のものも含めて記録することで、今、病に苦しむ人を救うことはもちろん、先の研究にも役立つことを願って本書をまとめたのです。

張仲景の死後、西晋の王叔和によって編集復刻されました。その後日本に伝わり、江戸の儒医・香川修徳の手を経た1冊が、本学図書館の特別書庫で大切に保管されています。現物は線装本で、文字の書かれた面を外側に2つに折り重ねて、折り目の反対側が糸で綴じられています。

内容は、東洋医学の診察法である「脈診」についての話題から始まり、「三陰三陽」の病態についてと続いていきます。三陰三陽とは、病気の進行過程を6段階に分けたもので、現代の漢方医学では六経分類とも呼ばれます(図参照)。文中では、それぞれの病期や症状の進行状況に合わせた処置・処方などが挙げられています。

「脈四損、三日死…(四損という脈が現れると3日で死ぬ)」、「風家表解、不了了者十二日愈」(風邪が表向きよくなったがはつきり)

【図】三陰三陽 ①から⑥へと症状が進行していく

①	太陽病	頭痛、首のコリ、悪寒
②	少陽病	喉の乾き、眩暈
③	陽明病	悪熱
④	太陰病	腹痛、下痢
⑤	少陰病	倦怠感、冷え
⑥	厥陰病	内蔵機能の衰え、意識レベルの低下



(漢)張仲景著；(晋)王叔和撰次；(日本)香川修徳 [校] 須原茂兵衛、安永8 [1779] A/090.11/C52

# あゆむ



## 特集「書物に見る疫病と人々のあゆみ」

疫病は、江戸時代には「流行病」と呼ばれ、今日における「伝染病」「感染症」という意味です。昔は疫病神や鬼、怨霊などによって疫病が流行すると考えられ、村に入ってきたようにしめ縄を張ったり、よそからやってきた疫病を村の外へ追い出そうと藁や紙の人形を川に流したり、祀ってなだめようとしてきたりしてきました。

歴史上、人間を悩ませ恐れさせてきた疫病には、ペスト、マラリア、疱瘡(天然痘)、麻疹(はしか)、コレラ、インフルエンザ、結核、発疹チフス、腸チフス、赤痢、梅毒などが挙げられます。

多くは風土病(一定の地域で持続して多発するその地方特有の病気)だったのが、文明発展による人口の増加や集中、いろいろな地域との文化交流による人や物の動きによって広い地域に伝播し、世界規模で

りしないのは12日で治る)など、その内容はかなり具体的です。また、「太陽病、項背強几几、無汗、悪風、葛根湯主之…」(太陽病で首や背中がこちこちに凝り、汗が出ない場合は葛根湯がこれを治す)と症状に対する処方薬を記述。薬については、服用方法だけでなく分量やレシビまであり、すぐにでも看病を始められそうな実践的な内容となっています。これは、パンデミックにより患者が爆発的に増えた際に治療マニュアルとなるよう配慮されたため、とも言われています。

## 展示案内

### 国立科学博物館 特別展 「毒」

みなさんにとって「毒」とは何でしょうか？自然界(動物、植物、菌類、鉱物)の毒や人工の毒について、さまざまな角度から紹介する展示会が国立科学博物館で開催されています。標本や模型、動画、各分野のスペシャリストが掘り下げて解説するパネルなどが、毒への興味や理解を深めることができるよう構成されて見応えたっぷり。進化している毒や日常にある毒とのつき合い方についても考えることができる展示です。

ある生物にとっては毒であっても他の生物にとってはそうでないものや、量や使い方によっては毒よりも薬になったりするものもあり、毒は常に危険なものとも言い切れません。疫病治療の薬にもそんな側面があるでしょう。毒々しくもエンターテインメント感ある「毒」展🍄ぜひ足を運んでみてください！  
【会期】～2023年2月19日(日)まで  
【会場】国立科学博物館(東京・上野公園)  
【入場料】2,000円(一般・大学生)  
【所要時間(目安)】じっくり見てまわって3時間くらいでした！

ただ、男女の交わりの後に発症する陰陽易という病には、異性の下着を焼いて灰にしたものを一日3回服用する、と驚くべき処置が明記されています。今となっては、まじないや呪術のように思えますが、当時はメデイカルな治療だったのでしょうか…。  
ともあれ、現代の漢方医学の礎として今でも読み継がれている『傷寒論』。自分が経験したことのある病気の症状について、どのような進行をたどるのか、どんな薬が処方されたのかなど確認してみるのも面白いでしょう。口語訳や解説書も多数出版されています。興味のある方は、まずはそちらから読んでみてはいかがでしょうか。

編集後記  
「書物に見る疫病と人々のあゆみ」特集、いかがだったでしょうか。紙面の都合上入れられなかったのですが、日本で恐れられていた疫病には他にも「麻疹」が挙げられます。江戸時代さいごに流行した文久2年(1862)には、医療情報や民俗的な知識も伝える「はしか絵」とよばれる浮世絵が盛んに出版されました。今号に関する展示では、この「はしか絵」も展示します。



孟齋芳虎画『麻疹養生伝』

## 第8号 目次

- P1・・・ 特集「書物に見る疫病と人々のあゆみ」  
コラム①、②
- P2-3・・・ 疫病と人々のあゆみ  
日本編/海外編
- P4・・・ 貴重書紹介、展示案内

タイトルの絵、★の画像は 菊岡沾涼述『本朝世事談綺』 河内屋茂兵衛：河内屋藤兵衛/000/Z00/M0026.1-3 より

## 「コラム②」 近代日本文学に描かれた疫病

疫病に対する不安や恐れは、歌や随筆、小説などの作り手を執筆へと突き動かす原動力にもなりました。近代でも多くの作家たちが疫病を大事な素材として書き残しています。夏目漱石『吾輩は猫である』の猫の主人・苦沙弥先生は顔に痘痕のある姿として描写され、天然痘の痕に苦悩した漱石自身の葛藤が投影されています。菊池寛『マスク』は約100年前のスペイン風邪蔓延中に執筆された自伝的な短編小説で、マスクを着用するかしないか逡巡する描写は、現在の感染症流行下の状況に通じるものがあるといえるでしょう。

作家本人が罹った疫病や、身の周りの疫病流行を題材にした作品は他にも志賀直哉『流行感冒』、尾崎紅葉『青葡萄』、正岡子規『病牀六尺』、石川啄木『一握の砂』など多数あります。明治から昭和の時代を生きた文学作家が、疫病をどのようにとらえ表現したのか、当時の人々が疫病にどう対処したかを知らせてくれる資料としても読むことができます。

いずれの作品も図書館に所蔵されています。OPACで検索してぜひ手に取ってみてください。

## 「コラム①」 疫病と祭

東京の夏の夜空を彩る「隅田川花火大会」は、実は疫病に由来します。享保17年(1732)、大飢饉と疫病により多くの死者が出たため、将軍徳川吉宗は慰霊と悪病退散を祈って隅田川で水神祭を行いました。翌年、両国橋周辺の料理屋が花火をあげたことから始まった「両国川開き」が、現在の隅田川花火大会の起源とされています。京都の「祇園祭」も疫病がきっかけで誕生しました。詳しくはP2の疱瘡の項をご覧ください。また、神奈川県の小田原市から静岡県東伊豆にかけて広く伝わる民俗芸能「鹿島踊」は、悪疫追放を始原とする踊りです。江戸時代に刊行された『本朝世事談綺』には、疫病除けのために常陸国(現在の茨城県)で鹿島踊が始まったことが書かれています。

このように、祭と疫病とは密接に関係しています。地元で伝わる祭や好きなお祭りの起源について、調べてみてはいかがでしょうか。



★『本朝世事談綺』より「鹿嶋躍」の項

# 疫病と人々のあゆみ



## 日本編

### ◆恐れられていた疫病、疱瘡

日本で古くから度々流行した疫病の一つに「疱瘡」（天然痘）があります。天然痘ウイルスにより皮膚に病変が現れる発疹性の感染症で、強い感染力と高い致死率を持つものでした。初期の流行は約30年毎でしたが、江戸時代の後半には毎年のように流行しました。疱瘡の流行については日本の史書に初めて記録されたのは『続日本紀』の天平7年（735）の項です。「天下豌豆瘡ヲ患テ、天死スル者多シ」と記され、当時の日本の全人口の1/3〜1/4が犠牲になったと推定されています。この時代聖武天皇は、神仏の力を借りて祭祀や祈願をするとともに、疫病に罹った人びとには食糧や薬を給付するなど実質的な施策も行いました。平安時代になると、疫病の流行は無実の罪を着せられ亡くなった霊の祟りによるものと考えられるようになり、御霊を鎮め災厄を祓うための御霊会が催されました。絢爛な山鉾巡行で知られる京都の祇園祭もこの御霊会が起源となっており、います。

### ◆疱瘡除けのまじない

有効な治療法が普及するまで、市井す。なお、著者の道墮とは仮名垣魯文のことです。



### ◆西洋医学の広まり

安政コレラるとき、オランダ軍医ポンペは、コレラの解説と処置法を弟子の松本良順に口述筆記させて配布しました。また、医師・緒方洪菴は西洋医学書のコレラに関する部分を翻訳し、『虎狼病治準』にまとめました。ポンペは安政4年（1857）、幕府が開校した長崎の医学校に招聘されます。ヨーロッパの体系的な基礎医学教

の人々にとつての疫病対抗策は神仏頼みやまじないが中心でした。疱瘡神（疫神）の存在が信じられ、疱瘡神を退ける加持祈祷や行事、逆に歌舞などで疱瘡神をもてなす祭礼が行われました。疱瘡神は赤色を嫌うもしくは好むといわれ、赤いものを身につけると疱瘡に罹らないあるいは罹っても軽く済むと信じられました。達磨や赤べこなどの郷土玩具に名残が見られます。

また、疫病除けの利益を持つといわれる呪符が日本各地に分布し、その一つである「孫嫡子」という疱瘡除けの守り札は江戸時代の多くの記録に記され、近松門左衛門『傾城反魂香』や十返舎一九『湯尾峠孫杵子』などの文学作品にも登場するほど有名なものでした。人びとは疱瘡から逃れるために守り札を戸口に貼ったり、守り袋に入れて持ち歩いたりしました。疫病除けとして頒布されていた呪符を、厄除けの御守りとして現在も授与する社寺もあります。



十返舎一九著、哥川國貞画『仇討湯尾峠孫杵子』山本平吉, 文政2 [1819] /000/Z00/M2047

育カリキユラムを導入し、その中には衛生学の講義もありました。日本で初めて近代的医学教育が行われたのはこのときです。文久元年（1861）には日本初の洋式病院を建設しました。なお、コレラの原因が解明されたのは、細菌学者コッホがコレラ菌の発見に成功した1883年のことです。

## 海外編

### ◆「黒死病」の異名をもつペスト

「疫病」と聞いて多くの人が思い浮かべる病として、ペストが挙げられるのではないのでしょうか。ここでは日本ではあまり流行せず、主にヨーロッパで爆発的に流行したペストについて取り上げます。ペストは歴史上三度のパンデミックを生んだといわれていますが、中でも有名なのは、その死亡率の高さと出血斑によって皮膚が黒ずんで見える症状から「黒死病」とも呼ばれ、14世紀中ごろヨーロッパに蔓延した第二のパンデミックです。

このパンデミックは、14世紀から18世紀まで断続的にヨーロッパ全土で猛威を振りました。その発端はクリミア半島の港湾都市で、当時ジェノバの植民都市であったカッファ（現在のフェオドシア）が、1346年にモンゴル軍（キプチャク・ハン国）に攻撃されたことから始まりました。この時モンゴル軍内でペストが流行し、瞬く間

### ◆医学の発展と疱瘡の根絶

疱瘡に一度罹ると二度と罹らない事実は古くから知られ、1796年イギリスの医師エドワード・ジェンナーは、牛痘を人体に接種して感染を防ぐ牛痘種痘法を発見しました。この手法をラテン語で牛を意味するvacca（ワッカ）からvaccinationと名付け「ワクチン」の語源となりました。日本には嘉永2年（1800）にもたらされ、各地に種痘施設が設置され予防接種が行われました。神田に開設された種痘所は文久元年（1861）には西洋医学所と改称されました。『西洋医学所種痘傳票』は、種痘後身体に生じる反応が良性か否か診断した証明書と思われ、『西洋医学所種痘傳票』【醫學所】、[文久3 (1863)] A/493/Se19



種痘後身体に生じる反応が良性か否か診断した証明書と思われ『西洋医学所種痘傳票』【醫學所】、[文久3 (1863)] A/493/Se19

明治期に種痘は法制化され、明治9年（1876）制定の「天然痘予防規則」以降、半ば強制的に行われました。日本の感染者は昭和30年（1955）が最後となり、1980年に世界保健機関（WHO）が疱瘡（天然痘）根絶を宣言しました。

にカッファでも拡大、ジェノバ商人は疫病から逃れるため船でイタリアへと逃げ出したのでした。この船はコンスタンティノープル、シチリア島、カタール（イタリア本土）を経てジェノバに到着したのですが、船にペストに感染した人間とネズミ（ペストはネズミに寄生するノミを介して人間に感染）が乗っており、これらの港は交易の中心地であったため、ヨーロッパ全体にペストが拡散したのです。この爆発的流行は1352年に一度収束しましたが、その後18世紀までヨーロッパ各地でほぼ10年ごとに流行が見られました。

### ◆ペストと文学

新型コロナウイルスの感染が拡大するなか、アルベール・カミュの『ペスト』が注目され、ペストセラールとなったことは記憶に新しいと思います。カミュの『ペスト』は約70年前に書かれた架空のペスト流行を題材にした小説ですが、中世からペストを題材にした作品が書かれています。

例えば、誰もが知る『ロミオとジュリエット』の悲劇にもペストがかかわっています。ジュリエットは、仮死状態にする薬を使った芝居を企てますが、その企てを知らせる手紙がロミオに届かず、ジュリエットが死んだと誤解したロミオは、彼女の墓の前で自殺。ジュリエットもロミオを失った悲しみに暮れて、後追い自殺という結末となっています。この手紙が届かなかった理由が、手紙を運ぶ使者の僧が途中でペスト患者と遭遇し、その患者とともに家に閉

### ◆コロリと死に至るコレラ

コレラは、コレラ菌で汚染された水や食物から感染する経口感染症です。もともとはインドの風土病でしたが、19世紀に入って世界的に流行しました。

日本で初めてコレラが発生したのは文政5年（1822）、西日本を中心に流行しました。次に流行したのは3回目の世界的流行が日本にも及んだ安政5年（1858）でした。長崎より上陸し日本各地で大流行したこの「安政コレラ」は、安政大地震後の江戸にも襲いかかりました。

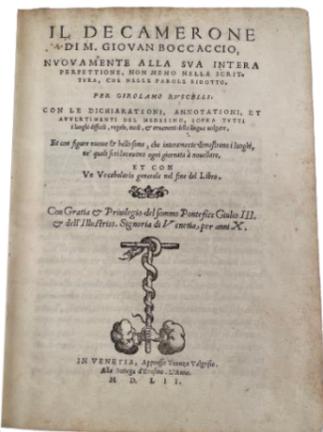
発症すると2〜3日で死に至ることから「即死病」、「三日コロリ」などと呼ばれ、感染の速さを虎に、恐ろしさを狼に例えて「虎狼病」、「虎狼狸」の字を当てることもありました。

### ◆人々の恐れと希望

猛威を振るったこの病に対し、人々は病魔や妖怪の仕業だとして、さまざまな邪気払いを行います。鐘や太鼓をたたく、神輿を担いで練り歩く、軒先にしめ縄や提灯を掛ける、節分のように豆をまく、といったお祭りのような騒ぎぶりが『武江年表』（江戸で起こったことについて編年で記録した書）など当時の記録からうかがえます。

安政コレラの流行が終息するころ、『末代嘯語掃寄草紙』が出版されました。コレラ流行時の戯画や戯作などを掃き寄せ集めた本で、疫病をパロディにして笑い飛ばしてしまおうとする当時の人々のたくましさが見えられます。

もう一つ有名なのが、1348年フィレンツェで流行したペストを題材としたジョバンニ・ボッカチオの『デカメロン』です。ペストの流行するフィレンツェを逃れた10人の若者が、10日間毎日1人1話ずつ話すという形をとり、合計100編をおさめた短編物語集です。この作品は短編物語集ではありますが、実際にフィレンツェで流行したペストの様子を目撃したボッカチオはその様子を克明に描いています。専修大学図書館には、1552年に刊行された古版本を所蔵しています。



『Il Decamerone di M. Giovan Boccaccio,...』 Appresso Vincenzo Valgrisio : Alla Bottega d'Erasmus; L'anno M.D.LII. [1552] A/973/B61

そのほか、1665年から1666年にかけてロンドンで大流行したペストの様子を描いた作品として、『ロビンソン・クルソー』の作者でもあるダンエル・デフォーの『ペスト（ペストの記憶）』（原題『A Journal of the Plague Year』初版1772年）も有名です。